

## 第 52 回 企業活性化研究分科会・議事録

＜第五二回 2012 年 9 月 22 日（土）時間：13：30～16：30 於：専修大学（神田校舎）＞

参加者：井端、大野、小林、柴山、齋藤、千葉、星野、宮川、山本（9 名）

### 1. テーマ：再生企業の研究—カネボウ株式会社

- ・報告者：菅原智久（代読：宮川宏）
- ・配布資料：9 枚
- ・報告内容の要旨

本報告は、カネボウ株式会社(以下、同社)の再生について分析したものである。同社は、明治 20 年 5 月に紡績会社として創業を開始し、昭和 36 年にはカネボウ化粧品を設立、翌 37 年 4 月に合併した。その後、天然や合成、化学などの繊維事業に乗り出し、薬品、事業、食品事業にも進出した。そして、平成 13 年にカネボウ株式会社に社名を変更した。同社は、平成 15 年 11 月の 9 月中間決算において 629 億円の連結債務超過へ陥ったことを発表した。その後、産業再生支援機構の支援を仰ぎ、内部調査委員会の立ち上げ、粉飾決算を行っていることが明るみとなり平成 8 年 3 月期から平成 16 年 3 月期まで 9 期連続の債務超過であったことが判明した。その結果、平成 17 年 5 月に上場廃止となった。

本分析は、同社の収益性分析と粉飾決算に関する検討をおこなった。収益性分析の結果、同社は資産の運用面では余剰資産が足を引っ張り、負債の運用面では金融費用の負担が重荷となり、利益を上げることが難しい状況であると推測した。また、同社の粉飾決算に関する検討では、売上債権回転期間や棚卸資産回転期間等の分析により、実態のない売上の過大計上、不良在庫や不良債権に対する評価の妥当性を検証し、循環取引と債務超過である子会社の連結外しという 2 つの粉飾が行われたことを指摘している。

同社の企業再生については、早期の段階で収益性の高い化粧品事業を残し、化粧品事業以外の不採算事業の切り離しをおこない、事業売却資金を債務超過への補填と新規事業への投資を行う必要があった。また、メインバンク・三井住友銀行の協力により、資金的援助が必要不可欠であるが、自力で再生する可能性があったのではないかと考察した。

### 2. テーマ：急激な信用低下にも対応できる財務分析法—シャープのケース

- ・報告者：井端和男
- ・配布資料：7 枚

### 3. テーマ：『RETRENCHMENT CAUSE OF TURNAROUND OR CONSEQUENCE OF DECLINE BY VINCENT L.BARKER III and MARK A.MONE』についての検討

- ・報告者：宮川宏
- ・配布資料：4 枚

(文責：柴山祥明)